II Kings, 16:2-20, 17:1-29, 18:1-3

１６章を始めるにあたって、もし、歴史がお好きなら、この箇所はとても面白いと申し上げて起きましょう。もしも、霊的なレッスンを求めておられるなら、とても実際的なことをこの箇所に見つけることでしょう。神さまのみことばのこの部分のほとんどが、大きな助けになります。これらすべてのことが起こったのは、私たちの模範となるためであったということを覚えておいてください。

アハズがユダを統治する

（II 列王記１５：２－３）「アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、彼の神、【主】の目にかなうことを行わず、イスラエルの王たちの道に歩み、【主】がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもに火の中をくぐらせることまでした。」

ペカは２０年間統治して、殺されました。ペカの統治の１７年目に、アハズがユダの王として統治を始めました。アハズは良い王ではありませんでした。

（II 列王記１６：４）「さらに彼は、高き所、丘の上、青々と茂ったすべての木の下で、いけにえをささげ、香をたいた。」

彼はイスラエルの王たちの邪悪な道に歩みました。彼は子どもたちをいけにえとして異教の神々にささげるというとんでもないことまでしました。おそらくメロダック（Merodach あるいは Marduk マルデューク：紀元前１８世紀ごろからのバビロニアの中心的な神）かバアルにささげたものと思われます。このようなしきたりは、人間が霊的に陥る最悪の状態で、アハズはこのようなことをしたのです。彼は
「高き所、丘の上、青々と茂ったすべての木の下で、いけにえをささげ、香をたいた」
と書かれています。言い換えれば、アハズは偶像と異教礼拝のすべてをやり尽くした、ということです。

（II 列王記１６：５）「このとき、アラムの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、エルサレムに戦いに上って来てアハズを包囲したが、戦いに勝つことはできなかった。」

イザヤの預言の7章に、このことに関する詳しいことが書かれている箇所があります。それはとても重要な箇所です。なぜなら、イエス・キリストの処女降誕の預言だからです。イザヤは、神さまに耳を傾けないこの男、アハズに対して預言をしています。そのようにしてイザヤは彼に神さまを信じるようにチャレンジします。ところが、アハズはアッシリヤに応戦を頼みます。そのことが、アッシリヤが下ってきて、最終的に北王国を捕囚にする扉を開くのです。

（II 列王記１６：６）「そのころ、アラムの王レツィンはエラテをアラムに取り返し、ユダ人をエラテから追い払った。ところが、エドム人がエラテに来て、そこに住みついた。今日もそのままである。」

「今日も」というのはもちろん、この記録が書かれたときまで、という意味です。

この節で、“ユダ人（Jew）”ということばが聖書で最初に使われています。“ユダ人（Jew）”にはユダ部族しかあてはまらない、という見方をする人たちがいます。でも、ここでユダ人ということばが北王国イスラエルの人々をさしていることを見てください。事実、アラムとの境に住む人々です。これから見て行きますが、１２部族全部にその名前が与えられていました。

（II 列王記１６：７－８）「アハズは使者たちをアッシリヤの王ティグラテ・ピレセルに遣わして言った。『私はあなたのしもべであり、あなたの子です。どうか上って来て、私を攻めているアラムの王とイスラエルの王の手から私を救ってください。』アハズが【主】の宮と王宮の宝物倉にある銀と金を取り出して、それを贈り物として、アッシリヤの王に送ったので、」

そうしてアッシリヤ人は賄賂を受け入れました。彼らはアハズを助けるために来て、まずアラムのダマスコを襲撃し、そしてその町を取ります。

（II 列王記16：10）「アハズ王がアッシリヤの王ティグラテ・ピレセルに会うためダマスコに行ったとき、ダマスコにある祭壇を見た。すると、アハズ王は、詳細な作り方のついた、祭壇の図面とその模型を、祭司ウリヤに送った。」
アハズはこの祭壇と同じものを作って、神さまの宮に建てたいと思いました。その間ずっと、イザヤは彼と彼のしていることに対して預言していました。

（II 列王記16：17）「アハズ王は、車輪つきの台の鏡板を切り離し、その台の上から洗盤をはずし、またその下にある青銅の牛の上から海も降ろして、それを敷石の上に置いた。」
アハズは、まことの生ける神さまの宮に対して徹底的な不敬の念を示しています。

（II 列王記16：18－20）「彼は宮の中に造られていた安息日用のおおいのある道も、外側の王の出入口も、アッシリヤの王のために【主】の宮から取り除いた。アハズの行ったその他の業績、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。アハズは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにダビデの町に葬られた。彼の子ヒゼキヤが代わって王となった。」
アハズは神さまの家を台無しにしました。そして、宮の精巧な装飾物をすっかり取り去ってしまったようです。
この章は、アハズの死と、彼の息子ヒゼキヤが彼のあとに統治したという記録で閉じます。アハズのように邪悪な人物に、ヒゼキヤのような息子がいたというのは驚きです。ヒゼキヤの統治の物語を、これから次の章で見て行きます。

17章

テーマ：イスラエル、捕囚となる。
神さまがイスラエルを捕囚に渡された理由は次のようなものです。
1．“神さまに従わなかった”（13節）。
（II 列王記17：13）「【主】はすべての預言者とすべての先見者を通して、イスラエルとユダとに次のように警告して仰せられた。『あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通して、あなたがたに伝えた律法全体に従って、わたしの命令とおきてとを守れ。』」

2．“神さまを疑った（14節、また、II 歴代誌36：15－16参照）
（II 列王記17：14）「しかし、彼らはこれを聞き入れず、彼らの神、【主】を信じなかった彼らの先祖たちよりも、うなじのこわい者となった。」
（II 歴代誌36：15－16）「彼らの父祖の神、【主】は、彼らのもとに、使者たちを遣わし、早くからしきりに使いを遣わされた。それは、ご自分の民と、ご自分の御住まいをあわれまれたからである。ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、【主】の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。」

3．“神さまを無視し（15節）”、490年間も安息の年を守ることを拒否した。
（II 列王記17：15）「彼らは主のおきてと、彼らの先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告とをさげすみ、むなしいものに従って歩んだので、自分たちもむなしいものとなり、【主】が、ならってはならないと命じられた周囲の異邦人にならって歩んだ。」
（II 歴代誌36：21）「これは、エレミヤにより告げられた【主】のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。」
この民の物語は、すべての人の物語でもあります。

ホセアの統治

17章で、イスラエルに関する限りは終わりに至ります。北の10部族はアッシリヤの捕囚となって連れて行かれます。

(II 列王記17:1－2)「ユダの王アハズの第十二年に、エラの子ホセアがサマリヤでイスラエルの王となり、九年間、王であった。彼は【主】の目の前に悪を行ったが、彼以前のイスラエルの王たちのようではなかった。」
彼はアハブとイゼベル、またアハズヤのようには邪悪ではありませんでしたが、それでも十分に邪悪でした。

(II 列王記17:3－5)「アッシリヤの王シャルマヌエセルが攻め上って来た。そのとき、ホセアは彼に服従して、みつぎものを納めた。しかし、アッシリヤの王はホセアの謀反に気がついた。ホセアがエジプトの王ソに使者たちを遣わし、アッシリヤの王には年々のみつぎものを納めなかったからである。それで、アッシリヤの王は彼を逮捕して牢獄につないだ。アッシリヤの王はこの国全土に攻め上り、サマリヤに攻め上って、三年間これを包囲した。」
アッシリヤのシャルマヌエセルが出てきます。彼は北王国を攻め、彼らからのみつぎものを要求しました。シャルマヌエセルは、ホセア王が自分に対抗して陰謀を企て、みつぎものを納めなかったことを知ったとき、サマリヤを包囲しました。サマリヤは、アハブの父オムリが建てた町でした。アハブはそこに宮殿を建てました。その宮殿はその地でもっとも美しい場所のひとつでした。今、アッシリヤの王がそれを包囲しました。

イスラエルの捕囚

(II 列王記17:6)「ホセアの第九年に、アッシリヤの王はサマリヤを取り、イスラエル人をアッシリヤに捕らえ移し、彼らをハラフと、ハボル、すなわちゴザンの川のほとり、メディヤの町々に住ませた。」
10部族は失われた、という人たちがいます。つまり、これらの部族が英国に急に現れ、そこからアメリカ合衆国に広がったというのです。これは、自分たちが失われた部族のメンバーであると信じたい多くの人たちのプライドにとっては良い仮説ではありますが、でも、この失われた10部族という考え方は、全く人工的なものです。神さまのみことばのなかにはその仮説はありません。たとえば、新約聖書の中で、ヤコブは彼の書簡の中に次のように書いています。

(ヤコブ1:1)「神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。」

見たところ、ヤコブは部族が失われたとは思っていませんでした。この仮説を奉じる人たちは、10部族はアッシリヤに捕囚に行ったときに失われたのだと信じています。ユダヤ人たちが自分たちの地に戻ったとき、すべての部族から幾人かずつが戻って来ました。実際、民のほんの少しが戻りました。数百万人のユダヤ人たちが捕囚になり、その中からパレスチナに戻ったのは、約65，000人だけでした。

イスラエルの捕囚の原因となった罪

(II 列王記17:7－8)「こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から連れ上り、エジプトの王パロの支配下から解放した彼らの神、【主】に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、【主】がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の風習、イスラエルの王たちが取り入れた風習に従って歩んだからである。」
主はこの人々に対してとても忍耐深くあられました。王国が分裂したあと200年以上にわたって、主は彼らがご自分に立ち返るために十分な、あらゆる機会を与えて来られたのです。それでも彼らは主に立ち返りませんでした。彼らは続けて偶像礼拝に陥りました。神さまのみことばにははっきりと、神さまが彼らを捕囚に送られたと書かれています。なぜなら、彼らがほかの神々をあえて礼拝し続けたからです。

(II 列王記17:9－10)「イスラエルの人々は、彼らの神、【主】に対して、正しくないことをひそかに行い、見張りのやぐらから城壁のある町に至るまで、すべての町々に高き所を建て、すべての小高い丘の上や、青々と茂ったどの木の下にも石の柱やアシェラ像を立て、」

丘の上でも、木の下でも、異教の礼拝が続けられました。イスラエルはこのはなはだしい不道徳に身を任せたのです。

（II 列王記17：11－12）「【主】が彼らの前から移された異邦人のように、すべての高き所で香をたき、悪事を行って【主】の怒りを引き起こした。【主】が彼らに、『このようなことをしてはならない』と命じておられたのに、彼らは偶像に仕えたのである。」
神さまは異教徒たちを彼らの不道徳と偶像礼拝のゆえにこの地から追い出されました。神さまはご自分の民がその地に留まって同じことをするのを許可されると思いますか？そんなことはありません。神さまは、アッシリヤがやって来て彼らを捕囚に連れて行くことを許可されました。

（II 列王記17：13）「【主】はすべての預言者とすべての先見者を通して、イスラエルとユダとに次のように警告して仰せられた。『あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通して、あなたがたに伝えた律法全体に従って、わたしの命令とおきてとを守れ。』」
神さまは北のイスラエル王国の人々に、アヒヤ、エリヤ、ミカヤ、エリシャ、ヨナ、アモス、そしてホセアという預言者たちを送られました。南のユダ王国には、神さまはシェマヤ、ヨエル、イザヤ、そしてミカという預言者たちを送られました。後には、主はナフム、ハバクク、ゼパニヤ、そしてエレミヤを送られます。ひとりひとりの預言者が、もし彼らが神さまに立ち返って自分たちの邪悪な道を捨て去らないなら、どんなことが起こるかを、両方の王国の人々に警告しました。

（II 列王記17：14）「しかし、彼らはこれを聞き入れず、彼らの神、【主】を信じなかった彼らの先祖たちよりも、うなじのこわい者となった。」
根本的な罪は何でしょう？彼らは不信仰の罪で有罪でした。人類の大きな罪は、神さまを信じるのを拒否することです。あなたも私も、神さまを認めない現代の文化の中に生きています。私たちの教育システムの中に、神さまの居場所はありません。私たちの政府の役人たちは、神さまには興味がありません。残念なことに、今日多くの教会も神さまには興味がないのです。その結果として、神さまは昔々にご自分の民をさばかれたように、わたしたちをもさばかれるのです。

（II 列王記17：15）「彼らは主のおきてと、彼らの先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告とをさげすみ、むなしいものに従って歩んだので、自分たちもむなしいものとなり、【主】が、ならってはならないと命じられた周囲の異邦人にならって歩んだ。」
北王国は捕囚に連れて行かれました。南王国はどうなっているでしょう？

（II 列王記17：19）「ユダもまた、彼らの神、【主】の命令を守らず、イスラエルが取り入れた風習に従って歩んだ。」
これから見るように、ユダも、イスラエルの経験から何も学びませんでした。

（II 列王記17：20－21）「そこで、【主】はイスラエルのすべての子孫をさげすみ、彼らを苦しめ、略奪者たちの手に渡し、ついに彼らを御前から投げ捨てられた。主がイスラエルをダビデの家から引き裂かれたとき、彼らはネバテの子ヤロブアムを王としたが、ヤロブアムは、イスラエルを【主】に従わないようにしむけ、彼らに大きな罪を犯させた。」
ヤロブアムがイスラエルで子牛礼拝を開始したのを思い出されるでしょう。

（II 列王記17：22－23）「イスラエルの人々は、ヤロブアムの犯したすべての罪に歩み、それをやめなかったので、ついに、【主】は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおり、イスラエルを御前から取り除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリヤへ引いて行かれた。今日もそのままである。」
「今日も」というのはもちろん、II 列王記が書かれた日のことです。

イスラエルの町々に、外国人が住まわされる

アッシリヤの王は、北王国を捕囚にしたとき、ほかの人々をこの地に住まわせるために連れて来ました。北王国のその地域はサマリヤと呼ばれています。新約聖書のサマリヤ人たちは、アッシリヤの王に連れてこられた入植者の子孫です。これがサマリヤ人の始まりです。

(II 列王記17:26－29)「そこで、彼らはアッシリヤの王に報告して言った。『あなたがサマリヤの町々に移した諸国の民は、この国の神に関するならわしを知りません。それで、神が彼らのうちに獅子を送りました。今、獅子が彼らを殺しています。彼らがこの国の神に関するならわしを知らないからです。』そこで、アッシリヤの王は命じて言った。『あなたがたがそこから捕らえ移した祭司のひとりを、そこに連れて行きなさい。行かせて、そこに住ませ、その国の神に関するならわしを教えさせなさい。』こうして、サマリヤから捕らえ移された祭司のひとりが来て、ベテルに住み、どのようにして【主】を礼拝するかを教えた。しかし、それぞれの民は、めいめい自分たちの神々を造り、サマリヤ人が造った高き所の宮にそれを安置した。それぞれの民は自分たちの住んでいる町々でそのようにした。」

これで北王国は終わりです。この地はいろいろな民がミックスし、とても多くの他民族間の結婚が行われました。10部族は、二度と北王国を造ることはありません。彼らは今は散り散りになっています。でも失われてしまったわけではありません。

18章

テーマ:ヒゼキヤのもとでのリバイバルと試練。

さて、ヒゼキヤ王です。この箇所はあまりにもすばらしいので、II 列王記のここに記されているだけでなく、II 歴代誌とイザヤの預言の歴史の部分にも書かれています。

たった今私たちは、北王国がアッシリヤに捕囚として連れて行かれたことを見たばかりです。神さまはなぜこのことが起こったか、三つの理由をあげておられます。イスラエルは神さまに従わず、神さまを疑い、神さまを無視しました。この同じ期間に、南のユダ王国には、とてもすばらしい王がいました。この時点からあとは、私たちは南王国の歴史だけを追っていくことになります。なぜなら、北王国は消滅してしまったからです。神さまがこのときにユダを捕囚に送られなかったのは、ユダには、リバイバルのときを導いた何人かの良い王たちがいたからでした。

ヒゼキヤはそのひとりでした。事実、彼はダビデのあと、この地を治めた中で最善の王でした。

(II 列王記18:1－3)「イスラエルの王エラの子ホセアの第三年に、ユダの王アハズの子ヒゼキヤが王となった。彼は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はアビといい、ゼカリヤの娘であった。彼はすべて父祖ダビデが行ったとおりに、【主】の目にかなうことを行った。」

ヒゼキヤの父、アハズはとても邪悪な王でした。でも、彼にはこのすばらしい息子がいました。ということは、ヒゼキヤの母はとても立派な敬虔な女性だったと思われます。彼女の名前はアビだったと書かれています。